グァダルーペの聖母像信仰の謎の解明に向けて

加藤　薫

はじめに

去る2002年7月31日はメキシコのカトリック信徒たちにとっては忘れがたい日になっている。この日当時のローマ法王ヨハネ・パウロ2世がメキシコ先住民出身の改宗者ファン・ディエゴを聖人に認定し、正式に聖人列に加えたことを発表したのだ。メキシコ人の中でも先住民の出自を持つ初の聖人が誕生したということである。(図1)

図1

この機にメキシコ市を訪問した法王ヨハネ・パウロ2世は同市内にあるグァダルーペ寺院の新バシリカ礼拝堂にて、この報に沸き立つ数万人の群衆を前に約3時間に及ぶミサを実施した。聖書はスペイン語と、かつてディエゴも使っていた先住民言語であるナウア語で読み上げられた。主祭壇の後ろでミサを行う法王の後方頭上にはディエゴの巨大肖像画が掲げられ、新バシリカ礼拝堂の外ではアステカ時代の戦士の衣装を着て太鼓のリズムに合わせて踊る集団で満ちていた。(図2、図3)

図2

メキシコ現代政治の面からもこの日に画期的な出来事があった。PAN(国民行動党)出身の当時の大統領ビセンテ・フォックスもこのミサに参列したのだ。２０世紀初頭の1910年末にはじまるメキシコ革命とこの革命達成以後の代々の政権が、メキシコにおけるカトリック組織の特権的地位剥奪や土地など所有財産を没収して国民への還

図3

元を図ってきた歴史からして対立関係にあり、現職大統領が（私的にはともかく）公式の席でカトリックのミサに参列することはタブーだった。フォックス大統領の所属政党であったPANの起源は、メキシコ革命以後の反カトリック教会主義と社会主義的国家政策に対抗する目的で1939年に結成されたことにはじまる。いわば反革命系政党であったが、2000年に長期にわたるPRI（制度的革命党）支配に終止符を打つ政権交代を実現させた。こういった背景からフォックス大統領がローマ法王の公式ミサに参列することは新政権の政治理念をアピールするもとして必要なことだった。一般にはメキシコの政教が一体となり、横暴でプロテスタントの支配する隣国アメリカ合州国の抑圧を打破するという姿勢を見せる効果もあった。（図4）

図4

ファン・ディエゴを聖人化する動きは過去に何回もあったが、2002年の結果にむすびつく最新の動きは公式には1981年にはじめられた。以後の12年間の間に国内外にある約4千点の文献調査と図像調査を実施し、「聖人に値する」との結論をもってバチカン教皇庁に答申した。特筆すべきはこの調査期間中にもグァダルーペの聖母とファン・ディエゴ崇拝にまつわる幾つかの奇跡譚が新たに生まれ、調査結果にも何がしかの影響を与えたことだ。

その一つ、1990年5月3日から6日にかけて少年ファン・ホセ・バラガン（当時19歳）に起こった奇跡話しを紹介しよう。人生に絶望したファンは5月3日

に自殺を図り、アパートの3階ベランダから10m下のコンクリト舗道に向かって頭を下に身投げした。発見が早く意識不明だったがまだ心臓が動いていたので救急車で病院に搬送された。その車中から母親はファン・ディエゴとグァダルーペの聖母の両者に救いと加護を求め、病室でも祈り続けた。5月5日には医者ももう処置なしと治療行為を中止した。ところが少年ファンは翌5月6日にはほぼ回復した状態で起き上がった。折れた骨はつながり、血管も神経網も元通りになっており、頭痛などの後遺症も残らず、退院した。現代にもたらされたファン・ディエゴとグアダルーペの聖母の奇跡譚である。

2002年7月の法王の公式ミサ以後、1981年以来の厖大な蓄積のある調査結果や解釈は宗教的役割を終え、新たに学術的資料として残された。そして調査に携わった研究者や彼らの次世代研究者による一般向け出版物も刊行されるようになってきた。それらの中には、これまで行方不明とされてきた文献資料の再発掘や、新たに導入されたデジタル技術の応用で初めて明らかになった図像細部の新発見など、グアダルーペの聖母信仰の発生から伝播にまつわる新解釈を可能にしたものがある。勿論、一方ではグァダルーペの聖母図像の発生についての謎をさらに深いものにした面もあるのだが、本稿ではこのグアダルーペの聖母図像への新しいアプローチを紹介する形で整理してみる。

1．ファン・ディエゴの記録について

ファン・ディエゴとグアダルーペの聖母との出会いについて書かれた最古の記録はニカン・モポウア（Nican Mopohua：ナウア語で「ここである物語を既述する」という意味）で1545年から1548年の間にアントニオ・バレリアノ（1520年頃生まれ？～1605年歿）がファン・ディエゴのナウア語口述を筆記し，さらに約10年の歳月をかけて出版物になるよう編纂したものである。ただし1556年から開始された、その内容の真偽を検証する聖職者たちの延々と続く神学論争のために、実際に出版されたのは1649年であった。

バレリアノはアスカポサルコのマセワル階級の生まれでナウア語を母語としたが、元々の先祖はテパネカ王国の貴族階級の出身だった。この出自から、スペイン人征服直後から異文化社会の長期的支配を考えて4歳から10歳位の男子を親元から引き離し寄宿舎生活での教育を通じて西洋化を図るためにトラテロルコに

創設されたコレッヒオ・デ・サンタ・クルスの第1期生となり、ここで聖書、ラテン語、スペイン語、西洋哲学などの知識を修得した。

バレリアノはナウア語とスペイン語の二言語に通じていたため、1547年から「ヌエバ・エスパーニャ事物総史」を編纂したサンフランシスコ修道会士ベルナルド・サアグンの助手も務めた。ニカン・モポウアの筆記作業はこの業務の直前から始められたものだった。ちなみにバレリアノの才能は高く評価され、出身校コレッヒオ・デ・サンタ・クルスの総長就任の他、メキシコ市の先住民側統治者の一人として35年以上も君臨するなど、スペイン人の副王や聖職者たちに受容されていた知識人だった。従ってニカン・モポウアの記録内容についてもかなり信頼度が高い。(図5)

図5

印刷前の原稿はバレリアノの死後、彼の生徒となって西洋文化とアステカ文化について学んだネサウアルコヨトル(テスココ王国の統治者)の息子で後に歴史家となったフェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルショチトルの手元で保管され、イシュトリルショチトルの死後から数回は所有者が変わった後、1700年に実施された在庫調査からイエズス会所有のコレッヒオ・デ・サン・ペドロ・イ・サン・パブロの蔵書となっていた。但しこの在庫調査で特定されたニカン・モポウアがバレリアノの筆記した原本そのものなのか、誰かの手による写本(コピー)なのかどうかは不明である。いずれにしてもコレッヒオ・デ・サン・ペドロ・イ・サン・パブロの貸出し記録では、1770年以降誰もアクセスした形跡はないそうだ。

歴史の中でもはや誰にも注目されることのなくなった文書だが、実に不思議なことが1847年に発生する。1845年にはじまった米国—メキシコ戦争の結果、米国スコット将軍ひきいる軍隊がメキシコ市にまで侵攻した際、ピンポイントでこのコレッヒオの所蔵品であるニカン・モポウアを略奪したのだ。スコット将軍がどのような意図とどのような情報からこの行為に走ったのか全く不明である。いずれにせよこの時点よりニカン・モポウア文書はワシントンにある現在の国務省公文書館に保管されるようになったというのが定説であった。しかし、1981年にはじまる国際的なファン・ディエゴ関連文献の調査で明らかになったこと

は、もはやワシントンの国務省公文書館には存在せず、ニューヨーク市の市立パブリック・ライブラリーで一部の所蔵頁が確認されたのみである。しかもそれが原本オリジナルのものでなく、写本（手書きコピー）の可能性も指摘されるに至っている。何やら推理小説の材料にもなりそうな裏組織による国際的陰謀も想定されるが事実は不明である。まずは1649年の印刷物から理解できるファン・ディエゴの体験について再現してみよう。

1－1.

ファン・ディエゴの正式名はファン・ディエゴ・クアウトラトアツィン（＊ナウア語で「話しを伝える鷲の意味」）であり、このナウア語の原名は後述するように、グアダルーペの聖母の出現や図像の奉献に極めて象徴的な意味を持つ。1474年頃、テスココ王国内クアウティトラン村の生まれで、一族の先祖は新参のチチメカ人移住者だったが、ファン・ディエゴの父の代にはマセワル（土地持ちの一般市民だが中産階級下層）の身分にまで昇格し、ファン・デイエゴはその後継者であった。（図6）

図6

スペイン人の征服後の1525年（50歳）に妻となるマリア・ルシア（洗礼名）と共にサンフランシスコ修道会士から洗礼を受け、その洗礼名がファン・ディエゴであった。メキシコで最も初期にカトリック式の洗礼名で婚姻関係を結んだカップルである。しかしながら妻マリア・ルシアは1529年に亡くなる。

一人残されたファン・ディエゴはクアウティトラン村に近いトルペトラク村に住んでいた洗礼名ファン・ベルナルディノという、老いて一人暮らしの叔父の家に引越し、面倒をみながら農業を行う二人暮らしを始めた。

精神生活を充実したものにしたく、ファン・ディエゴはより深くキリスト教を理解しようと思ったが、近くに施設がなかったので、直線で約15km離れたトラテロルコのドクトリナ（教義学校）に週1度は通う生活を始めた。当時トラテロルコやテノチティトラン（メキシコ市）はまだテスココ湖上の島の状態で、2本の湖上道で本土と繋がっていた。従ってファン・ディエゴの通ったルートは、

図7

トルペトラク村から南下し、湖岸を西、北と回り、テペヤックの丘麓で東に向かい、湖上道を通ってトラテロルコに到着するというもので片道4時間強かかった。

1531年12月9日は土曜日だったが、この日は特別に修道士との公開教義問答会が開催される日で、ファン・ディエゴは当然の如く早朝に出かけた。湖岸を回り、テペヤックの丘の麓を通りすぎようとすると、丘の上から数種類の異なる鳥声の美しい歌のコーラスが聞こえてきた。白日夢かと丘の東の方を見上げると、亡くなった両親や祖父母が花とトウモロコシの穂にあふれた土地（＝土着世界の夢の楽園のイメージ）でなごやかに談笑している光景が見えた。そして突然に女性の声で「ファンツイン、フアン・ディエゴツイン（どちらも洗礼名をナウア語風邪に変形した呼称）」と呼び掛けられた。（図7）

丘の頂上付近を見ると、太陽の光を受けてビーム光線を背中側から放出し、全身を輝かせた女性が、ケツアル鳥の羽毛や輝石を縫いこんだような襞の多い衣装を着て、虹色に輝く岩の上に立っていたという。そしてテスココ方言のナウア語で自分は「神の母」であると自己紹介したようだ。具体的には「神」が teotl dios とナウア語＋スペイン語で表記されているが自らを「グァダルーペの聖母」だとは一度も述べていない。また聖母自身が「神の母」であるとのコンセプトは西洋では17世紀になってからの表象であり、19世紀になってようやく公式に認可されたもので、16世紀前半にメキシコで語られたことだったのならば実に革新的なことだった。

次にこの「神の母」は自分の願い事を赴任（1528年）してまだ間もない初代司教ファン・デ・スマラガに伝えて欲しいと依頼する。その願い事とは、「神の子（イエス・キリスト）を見せるための小さな家を（テペアックの丘に）建ててほしい」ということだった。そして何故にその伝令役をファン・ディエゴに託すのかといえば、洗礼前の名がクアウトラトアツィン（話しを伝える鷲）だからで、まさにその名に相応しい役目を与えたかったからだったと説明した。このメッ

セージの持つ含意は非常に大きなもので、ファン・ディエゴがどのくらい理解したのか解説はないが、先住民の認識に照らして考えてみれば、ある一つの神殿建設は単に建造物を一つ増やすといった物理的な問題ではなく、その神殿を核とした新コミュニティー建設、新しい社会組織の立ち上げまでを意味するものだった。だから「神の母」の願いとは、実は先住民主体の新しい家（教会堂）を中心とした新しい信仰（キリスト教）の共同体を創るようスマラガ司教に伝えろというものだった。

さて、誠実なファン・ディエゴはこの神の母なる女性の指示に従って司教座のある聖庁（首都の司教座付大聖堂はまだ未完成）に赴き、スマラガ司教にメッセージを伝えた。スマラガは話しを聞くことは聞いたが全く信用せず、追い返した。ファン・ディエゴはテペアックの丘で待つ神の母にこの顛末を報告し、先住民出身者ならもっと身分の高い人物に委託するのでなければとりあってもらえないと訴えた。しかしこの神の母は無視して翌日もスマラガ司教に同じメッセージを再度届けるよう依頼した。日曜日である 12 月 10 日に再度スマラガに直接伝えた。

２回目の反応としてスマラガは、ディエゴの話しが本当ならば次回は何か証拠となるものを持参せよ、とも命じた。一方では部下である二人の助祭を呼び、ディエゴの後をつけてこの話しを仕掛けたのがどこの誰であるかを確認せよとも命じた。テペヤックの丘の麓に来た時、その理由までは明記されていないが、この二人の追跡者はディエゴの姿を見失った。しょうがなく二人はスマラガの元に帰ったが、見失ったと正直に報告すると無能とおもわれると判断し、トルペトラク村の自宅に帰ったと虚偽の報告をした。一方、追跡者がいたことなど知らなかったディエゴは＜神の母＞に再会し、スマラガに証拠の品をもってこいといわれたことを報告した。＜神の母＞はそれならちゃんと証拠となる品物を渡すことを約束し、明日もう一度会いに来るようにとディエゴに伝えた。

自宅に帰ると同居人の叔父ファン・ベルナルドの容態がおかしく、瀕死状態になっているのを発見した。翌朝、早朝からディエゴは地元で先住民伝統の治療師を呼び、看病に努めた。治療の結果、老衰もあってもはや回復の見込みはないので内々に葬儀の準備をするよう助言された。この日、即ち 12 月 11 日の夕刻になって、ベルナルドはファンを枕元に呼び、死期が迫っているようだがどうせ死ぬな

らば改宗したキリスト教徒として死にたいので、臨終の告白を受け、終油の秘跡を施してくれる聖職者を連れてきてくれと頼んだ。

12月12日の早朝、寒いので防寒用のティルマ（外套）を着たディエゴはベルナルドの願いをかなえる唯一の頼みの綱であるトラテロルコの礼拝堂を目指した。テペヤックの丘近くに来た時、前日の＜神の母＞との約束を破ったことに気がつき、会わずにすむようにと迂回路を辿った。しかし丘の上から目ざとくディエゴの姿を見つけた「神の母」は、空中を飛ぶように駆け下りてきて眼前に立った。ディエゴは約束を果たせなかった理由として叔父ベルナルドが危篤状態にあること、これから臨終に立ち会う聖職者を求めてトラテロルコにゆくことを述べた。すると＜神の母＞は、「心配無用。病気は誰も傷つけることはない。私は＜神の母＞であり、信者は私の庇護の元にあるから……」と述べた。この＜神の母＞の言葉が発せられたのとほぼ同時刻に＜神の母＞はベルナルディノの元にも顕れ、治療を施した後、その正体を明かすある伝言も残して去った。留意すべきはここまでのディエゴの口述記録では、まだ一度も「聖母」とか「マリア」という言葉を使っていないことである。

叔父ベルナルディノの容態の変化など知る由もなかったディエゴだったが、ここにきてまた＜神の母＞の言葉を信じ、証拠の品を持ってスマラガの元にゆくことを誓った。まずは指示通りにテペヤックの丘の頂上に行くと、そこは岩だらけでサボテン以外の植物などはえる土もない場所なのに、季節はずれのバラの花をはじめ多種多様な花が咲き乱れ、鳥のコーラスも聞こえてきた。ディエゴは自分の判断で花を摘み、ティルマの中に包んで持ち帰った。＜神の母＞はディエゴが集めてきた花を選び直し、並べ方も変えてからそれらを再びティルマに包み直してディエゴに託した。（図8）

図8

12月12日の同日午後にスマラガとの三度目の面会を求めて聖庁を訪れたディエゴは、従者たちに面会を拒絶され長時間待たされた

が、その間にティルマから花の香りが放出された。魅惑的な芳香に気がついた従者たちは、その香りの源泉である花を見るや奇跡を理解し、すぐにスマラガを呼んだ。スマラガがティルマの結び目をほどくと、花が床に落ち、ティルマの内側には輝くような聖母像が顕れた。スマラガは泣いて許しを乞い、ディエゴの首からティルマをはずすと、すぐにそれを聖庁内の個人礼拝所に奉献し、ディエゴにはねぎらいの食事と、すでに夕暮れ時となっていたのでスマラガの寝所が宿泊場所に提供された。(図9)

図9

翌日の12月13日の朝、ディエゴの案内でスマラガは<神の母>が希望した礼拝堂の建設場所を視察し、即断で自ら礎石を置いた。そして2週間後の12月26日にはバシリカ様式のアドベ壁に白色の漆喰上塗り、両切り妻構造のわら屋根を持つ簡素な礼拝堂が完成し、像のあるティルマも奉納された。完成直後にディエゴはこの礼拝堂に駐在する許可を得、東側にワンルームの小部屋を自力で増設した。ディエゴはこの小部屋を指して「エルミタ=隠遁所」と呼んだが、すぐにこの礼拝堂全体の名称としても使われるようになった。ミサが定期的に実施され、また巡礼地にもなったことからもはやエルミタとは言えない情況にあったが、1544年5月15日に叔父ベルナルディノが逝去するとディエゴはここに常駐するようになり、サンフランシスコ修道会士の外衣を着て毎日建物内外を清掃し、ミサの如才を務め、巡礼者や礼拝者に乞われれば建堂の由来などを説明するガイド役もこなし、1548年に他界した。前述したアントニオ・バレリアノの口述記録はこの場所で採取されたものだった。(図10)

1－2.

さて「グァダルーペの聖母」というアイデンティティはいつどこで生まれたものなのだろうか。ニカン・モポウアの記録によれば、ファン・ディエゴ自身は<神の母>と何度も直接対話したにもかかわらず、一度として直接聞いてはいない。

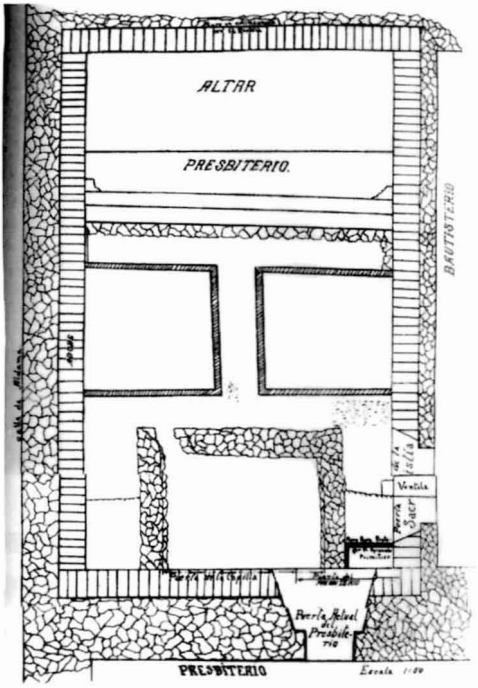

図 10

初めてその名を耳にしたのは叔父のベルナルディノであった。12 月 13 日にスマラガ司教を案内した時点で＜神の母＞への役目を終えたと判断したディエゴはベルナルディノの容態も気になるので帰宅を願った。スマラガは数人の従者をつけ、もし叔父ベルナルディノの容態が回復し元気なようだったら改めて連れてくるようにと指示した。ディエゴ一行を迎えたのは、もう普段のように歩き回れるほどに回復したベルナルディノであった。再会と奇跡による回復を喜び合う二人は早速にスマラガの元を訪れた。そしてスマラガの質問に答えるベルナルディノの口から「全能のグァダルーペの聖母」の名称を伝えるよう依頼されたことが告白された。

ニカン・モポウアに記録されたこの言説に対してはすでに同時代の神学者たちからも疑義の声が上がり、それが出版の遅延に繋がった。代表的な疑義としては以下の 2 点が挙げられる。

(1) グァダルーペ（Guadalupe）の名称に含まれる「g」音と「d」音は当時のナウア語にはない語音で聞き取れたわけはなく、何かの間違いから関係つけられた名称が適用されただけである。

(2) スペインのエストレマドゥーラ自治州で 14 世紀の彫像発見以来使われてきたこの名称はそもそもアラブ語起源であり、その名称をもった聖母が新大陸に登場するとはあまりに唐突である。

これらの疑義に対する反論としては以下のようなものが挙げられる。

① 二人の洗礼名には「g」音も「d」音も含まれており、洗礼時点ですでに聞

き分けられる能力を身につけていた。

② この奇跡の＜神の母＞が「グァダルーペの聖母」以外の具体名で呼ばれた証拠なし。

③ 征服者エルナン・コルテスはじめとするスペイン人征服兵士にはエストレマドゥーラ出身者が多く、スペイン人にも受容可能な聖母名称だった。

④ 「マリア」の名称もヘブライ語起源でありながら一般化している事例もあり、語源から考えるのはそもそも無意味。

⑤ 「グァダルーペの聖母」以外の「テペアカの聖母」などの異称が文献に登場してくるのは 1556 年以降のことで、それ以前に間違いを指摘するような事例がない。

図像的な関連性で見れば、グァダルーペの聖母信仰の起源とされる、スペインのサンタ・マリア・デ・グァダルーペ王立修道院所蔵の木彫像と、ティルマに顕現した平面図像とは図像学的に検討しても無関係なことが明らかである。ここでの結論としては「グァダルーペの聖母」像でなければいけない理由は依然として不明だが、同時に「グァダルーペの聖母」像であってはいけない理由もない、ということである。(図 11)

図 11

さて、ファン・ディエゴが聖人に列せられたというメキシコ人にとっては喜ばしいことではあろうが、最古の文献であるニカン・モポウア（現在残っているものが真性のオリジナルものであるという保証はない）の記述に埋め込まれた巧妙な仕掛け—それは西洋の異文化社会の支配とキリスト教への改宗を促すもの—として解読されるべき点を幾つか挙げてみる。まずは 12 月 12 日の＜神の母＞とファン・ディエゴのとった行為の記述である。

＜神の母＞はファン・ディエゴの洗礼前のナウア語の名前を知っており、その意味が「話しを伝える」鷲、即ちメッセンジャーであることも理解していた。そ

してこの＜神の母＞はまずディエゴにテペヤックの丘に登り、花を摘んでくるように指示したが、どの花を何本というような詳細な指示はしていない。つまりまず先住民であるファン・ディエゴの基準(どれが良くてどのような価値があるか)、即ち先住民の伝統的規範に従って主体的に選ばせたことだ。＜神の母＞がその成果に少しだけ手を加えたが、その目的は西洋出身者たち（スマラガ司教と従者たち）に理解可能な形にアレンジし直す手助けをしたというレベルの話しである。またディエゴは花の他に鳥のコーラスを聴いているし、12月9日の最初の出会い直前には先祖の暮らす死後の楽園のイメージも幻視している。つまり先住民にとっては花や歌が「真理・真実」の象徴であることや、真実は理性だけでは理解不可能であるという先住民の思考について熟知しており、そのことを反映した記述になっていることだ。つまり先住民の文化伝統に敬意を払いつつ新しい渡来人とのコミュニケーションの回路を築くというシナリオである。

さて最後の疑問として、何故＜神の母＞は実名をファン・ディエゴには明かさず、奇跡の治療を施した叔父のベルナルディノに告げたのか考えてみたい。まずは先祖や年長者に敬意を払うという先住民の慣習を踏襲し、ディエゴとの関係ではベルナルディノが血縁のある年長者であるという事実に敬意を払ったという点が挙げられる。また改宗によって旧共同体内での長老という身分を喪失したベルナルディノに新時代の幕開けを告げる役を与える精神的救済という面も考えられる。この点を補強するために、伝統的な先住民の手法では治療不可能だった病気が新しい信仰の力によって回復したという事実を示し、その語り部となる演出を施したとも考えられる。

つまり、ニカン・モポウアはファン・ディエゴの経験談の口述筆記という記録文献という外観を装いながら、知的にも深い政治的戦略を織り込んだものだと判断できそうだ。筆記者であるアントニオ・バレリアノはナウア文化とスペイン文化両方に精通した知識人であり、出版原稿用に編纂するのに約10年の歳月をかけていたから熟考を重ね、加筆修正する時間は十分にあったと推察できる。また出版以前にこの草稿の次の所有者となった歴史家イシュトリショチトルもバレリアノに劣らない知識人であったので、ここでも加筆修正が施された可能性も考えられる。だがいずれにせよ改竄の証拠は明示できない。

一般的通説として、グァダルーペの聖母像は西洋人的容貌に黒い髪の毛と褐色

の肌の表象を持つため、新大陸で新しく生まれた混血の人種（メスティーソ）の表象として神から与えられたものであり、それゆえに信仰を集めてきたというものがあるが、どうもそれだけではなさそうだ。この節の最後にグァダルーペの聖母が出現した 1531 年の必然性を歴史的に分析してみようと思う。

1521 年のエルナン・コルテスによるアステカ王国の首都テノチティトラン攻略成功後、1522 年から宣教活動が開始された。1524 年にはサンフランシスコ修道会、1526 年にはサント・ドミンゴ（ドミニコ）修道会という托鉢修道会系修道士たちによる布教・改宗活動が開始され、1528 年には初代司教ファン・デ・スマラガが赴任する。同年には初代アウデンシア（司法行政官）ヌニョ・デ・グスマンも着任した。

しかし先住民や先住民文化の扱いを巡ってすぐに聖職者組織とアウデンシアは対立し、1530 年にはスペイン人兵士によるスマラガ司教暗殺未遂事件も起きた。西欧内では宗教改革の立役者マルティン・ルターが「悪魔はマリアの名において信徒を欺く」ので、マリア出現の迷信の根源を絶つべきであるという主旨の発言を行ったのも 1530 年であった。要するにメキシコのカトリック系聖職者たちは世俗レベルではスペイン人行政者の悪政を排する闘いと同時に、キリスト教組織内のプロテスタント派からの批判にも対抗する必要に追われ、大きな危機感を抱いていた。

1532 年にはハレー彗星が出現し、日蝕もあったことから、世界の終焉という不安な予感に満ちた年でとなった。カトリックの聖職者たちは、不安がる先住民の心に「愛」と「希望」のメッセージを届ける必要性を誰よりも感じていた。こういった歴史的背景を考えると、12 月のグァダルーペの聖母出現はあまりにもタイムリーな出来事だったと言える。さらにうがった見方をすれば、グァダルーペの聖母の出現は、ある知者の深遠な構想に基ずくカトリック信仰のサバイバルのためにマニピュレートされた奇跡譚であった可能性もあるということでもある。

さてこの後の作業としては 17 世紀後半までに刊行されたファン・ディエゴとグァダルーペの聖母像の関係に言及した文献（ざっと１０点くらいある）を逐一検証する必要があるのだが、ナウア語に疎い筆者の能力を越えることもあり割愛し、本稿の主題である図像の検証に入る。ちなみに 1648 年のファン・ディ

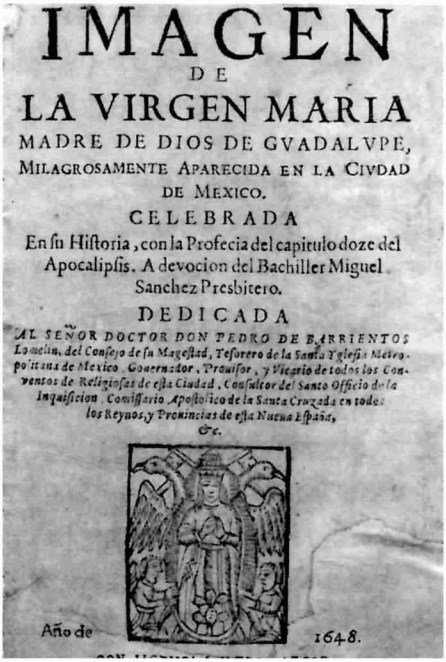
IMAGEN
DE
LA VIRGEN MARIA
MADRE DE DIOS DE GVADALVPE,
MILAGROSAMENTE APARECIDA EN LA CIVDAD
DE MEXICO.
CELEBRADA
En su Historia, con la Profecia del capitulo doze del
Apocalipsis. A devocion del Bachiller Miguel
Sanchez Presbitero.
DEDICADA
AL SEÑOR DOCTOR DON PEDRO DE BARRIENTOS
Lomelin, del Consejo de su Magestad, Tesorero de la Santa Yglesia Metropolitana de Mexico, Gouernador, Prouisor, y Vicario de todos los Conventos de Religiosas de esta Ciudad, Consultor del Santo Officio de la Inquisicion, Comissario Apostolico de la Santa Cruzada en todos los Reynos, y Prouincias de esta Nueua España,
&c.
Año de
1648.

図 12

エゴ没後百周年を記念してミゲル・サンチェス神父が執筆・出版した「神の母、聖母グァダルーペのイメージ」は全文スペイン語で書かれたため、以後グァダルーペの聖母出現物語の公式テクストと評されるようになった。しかし、神学的な組み立てとしては、グァダルーペの聖母を１２人の旧約聖書で語られる預言者たちの姉と位置づけた奇妙な発想もあり、どちらかというと歴史書に分類されるものである。（図 12） 1649 年にはルイス・ラッソ・デ・ラ・ベガが、過去のナウア語原典を引用したグァダルーペの聖母信仰の発生から発展の歴史を全文ナウア語で記述した著書 Huei-Tlamahuicoltica を出版したが、同署の研究者は稀で評価も定まっていない。

2．グァダルーペの聖母図像の検証

ファン・ディエゴのティルマに出現したというオリジナルのグァダルーペの聖母図像は、2012 年現在、メキシコ市ラ・ビリャ地区にあるグァダルーペの聖母寺院敷地内にある通称新バシリカの名で呼ばれる礼拝堂内に展示されている。ただ訪れる信者や観客の目線からはかなり遠い約５メートル上方の壁にあり、動く歩道に乗らないといけないことやガラス入り額装のため、細部はほとんど確認できないという研究者泣かせの環境にある。（図 13）

図 13

しかし幸運にも 1981 年開始の再検証の流れで、

1990年代後半に当時の最新デジタル撮影技術を駆使しての撮影が実施され、数十点の原寸大コピーがローマ法王訪問の時期に合わせて限定配布された。筆者もそのうちの1点を所有しているが正確に言えばコピーの再コピー（許可済み）である。現物には程遠いが図像研究には耐えられるほど鮮明であり、その成果を本稿に反映させることができた。

オリジナル図像の模写やデザイン案への応用はすでに16世紀から行われていた。1564年にはスペインのフィリピン諸島公式探検隊の旗にグァダルーペの聖母像が採用されたし、1570年には当時のスペイン国王フェリペ2世の元に油彩模写画が送られた。この時代は図像の保存や安全性はあまり考慮されず、むき出しのままの状態で壁にかけられていただけだった。信仰の拡大する17世紀になり、初めて額装にガラスカバーで覆われ（1647年）、一方、真正性検証のための調査が実施されるようになった。詳細は一度として公表されないが、どの調査でも結論は図像の真正性を再確認するものばかりであったし、同時に清掃中の事故でも奇跡的に無事だったというような新たな奇跡譚もつけ加えられるようになった。20世紀に入るとミクロ写真などの科学的手法による調査も実施され、1979年には眼科医アステ・トンスマンの調査でグァダルーペの聖母の両目には少なくとも計4人の人物像が映っていたと発表したが、詳細については依然公表されていない。ティルマの素材や顔料などの調査も数回実施されてはいるが、これらの内容も依然公表はされていない。信仰に係わる問題なのでとても慎重なのだろう。原寸大コピーを見ていると、16世紀には重要な意味を持っていた一部の図像表象が、17世紀になると無意味な装飾要素として扱われるようになった経過が確認できる。そしてこの無意味なものに解釈されるようになった部分こそが初期のグァダルーペ信仰の発生から伝播に重要な役割を担っていたことを確信するようになった。そのことを論ずる。

2-1. グァダルーペの聖母図像の概観

ティルマに描かれた平面図像には2種類の表現技法が共存している。一つは二次元の平面上に現実の三次元世界を再現するアプローチで、立体感を演出する線遠近法（透視図法）や陰影のつけ方で、これらは明らかに西洋の絵画技法の反映である。もう一つは衣襞の重なり具合や身体の立体性に考慮することなく平面上

のデザインとして描かれた装飾要素で、その典型は聖母の着るチュニックの金色装飾文様である。こちらは土着伝統技法の反映と解釈される。

雲の沸き立つ空の上で翼を広げた天使が支える三カ月の上に立ち、浮遊しながら両手を胸の前で合わせて祈るようなポースをとっている図像規範は聖書のヨハネ黙示録 12 章の記述「太陽の光に囲まれ、月を足元に……」に準拠するもので、<聖母降誕>や<聖母の被昇天>の図像でも同様の構成になっている。また腰の上部、胸の直下で結ばれた紫色のリボンは神の子を宿す妊娠の象徴で<無原罪の身籠り>図像によく登場するものである。但しここで類似した図像主題として挙げたものは全て 17 世紀になって広く流布したが、16 世紀の前半にはまだ稀であり、それがメキシコで突然出現したのならば、かなり革新的なことだったといわざるを得ないし、一体何人の聖職者が西洋内での実例に接した経験があったのか不思議でならない。奇跡としてしか解釈できないものだろうか。

図像表現に使われた個々の要素はキリスト教美術の図像規範の範疇で解説できるものだが、同時にナウア先住民文化の美術伝統の言説からの解釈も可能で、両義的である。この観点から、先住民やメスティーソたちがグァダルーペの聖母信仰を受容しやすい条件があったと論ずる研究者もいるが、その両義性の中には反キリスト教的な意味づけの言説も含まれており、そう単純ではない。ここではナウア文化の側からの理解を解説しておこう。

(1) 雲の表象：超自然的パワーのシンボルで、アステカ帝国最後の国王モクテスマ II 世がコルテスと初会見したときに使った挨拶の修辞にも使われた。このことから先住民社会のリニューアルの含意と読解できる。

(2) 聖母の足元にいる鷲の翼を広げた天使：両手で高くいけにえを捧げるアステカ時代の儀式の表象との相似している。この図像の場合、捧げているのは聖母の子宮の中にいるイエス・キリストであり、その代償として先住民の解放を願う図像と解釈できる。(図 14)

図 14

(3) 鷲の翼の色分け：虹のように色

分けされているが、順に青、暗緑、白、赤の４色が使われており、アステカ時代の世界の四方向の象徴色と対応している。即ち、青色は南方向の象徴で、更新や新生を意味する。暗緑は色彩配分から考えた黒色の代用色で、北方向の象徴であり、意思や努力を意味する。白色は東方向の象徴で、理解力や包容力を意味する。赤色は西方向の象徴で、調和や釣り合いを意味する。

図 15

(4) マントを飾る金色の星：かなりイラスト風に大きくちりばめられており、真偽のほどは確認できないが、メキシコ市で 1531 年 12 月 12 日明け方に見える星の位置を示しているそうだ。しかしかなり眉唾ものの説ではある。（図 15）

(5) 青緑色のマント：キリスト教の図像規範では聖母のマンとは伝統的に青色であるがここで暗部は青色で明部には緑色が適用されている。緑色がアステカ国王一族のみ使用が許された色で、より端的にはアステカ帝国支配者という身分の象徴であったことを意識し、グラデーションでわざとあいまいに適用した手法だと思われる。

(6) チュニックの色：ピンク色っぽい顔料が使われたようだが、ティルマの布地に吸収されてかなり土っぽい色合いになっている。それはメキシコの大地の象徴をとなることを意図したもののようにも見える。

(7) 天使がマントとチュニックの裾を持ち上げている構図：先住民の宇宙の「調和」意識の反映であり、空と大地の結合で新しい生命の誕生と再生のサイクルの象徴になっている。

(8) 三日月：子宮の象徴である。

(9) 三日月に乗っかっている聖母の姿：　アステカの女性格の神々が退場した後、新しい女神が君臨して宇宙の崩壊を防ぐという新しい神話のメタファーだとされる。

(10) 曲げた膝：チュニックの襞の具合から認識できるが、先住民の神々に捧げる踊りのポーズ、あるいは両膝を曲げて神々に祈るメキシコ最古の母

なる文明オルメカ時代より続く最高の祈りのポーズを暗示している。

⑾ 頭を下に傾け、右前方を向いて両手を合わせて祈る姿勢：西洋流の理解では無関心、面従腹背というネガティヴな含意で解釈されるが、先住民の発想ではある尊厳ある至高の存在に対して直視できないという尊敬と恭順の意思の表現だとされる。

⑿ 肌の色：ティルマの生地のせいだとも思えるが、褐色を帯びており、混血の新しい人種（メスティサーヘ）の誕生を象徴し、第一義的には精神的喪失を味わった先住民のために顕れたより人間的な＜神の母＞のイメージであると解釈される。

2－2.

上記2－1．の記述はこれまでの伝統的なグァダルーペの聖母図像から演繹される先住民性の解釈である。一方、チュニックの上に描かれた金色の花柄装飾文様については、まず技法的に異質な非西洋的表象であり、先住民の誰かが後から装飾のためにランダムに付け加えたものとして解釈され、図像研究から無視されてきた。しかしながら20世紀末に登場した新しいデジタル画像処理によりより鮮明な文様図柄が得られるようになり、ようやくそれらが主図像と同時期に描かれたもので、しかもナウア語の絵文字として解読されるべきものだと認識されるようになった。即ち、「花柄」の文様は単なる花以上に深い意味を表す表意文字であり、短縮された文章でもあるのだ。

かつてスペイン人征服者たちは異教の信奉者の痕跡を全て邪悪な悪魔の所産として破壊しまくった。次いでそれらが異文化を理解する手がかりとなることを理解し、残存物や再生物にスペイン語の注釈やアルファベット表記による発音を書き込んでいった。残存する絵文書類には余白にスペイン語の注記が直接書き足されたものも多い。この手法を逆転させる新種の発想、つまり西洋風の図像の上にナウア語絵文字を描きこみ、西洋起源の図像の意味をまだスペイン語のよく理解できない先住民出身者たちに理解可能なように提示されたということだ。

以下に花柄文様の分類とそれらのナウア語的解釈を記述する。まずチュニックの上のみにしか描かれていない花文様を分類すると、

● 花びらが4枚のもの（ハスミン＝ジャスミンか？） ― 1点

● 花びらが８枚のもの　　— ８点
● 枝までつけた花の房　　— ９点

これらの組み合わせからグァダルーペの聖母図像が、トータルには新しい「生命の創造者」であるという注釈がこの絵文字なら容易に解読できる先住民たちに示されている。

図 16

① 花びらが４枚のものの図柄解釈（図 16）
17 世紀以降に西洋からの渡来画家、あるいはクリオーリョ出身の職業画家によって描かれたグァダルーペの聖母図像から最初に消えていったモチーフであるとの研究調査もある。事実ならば、16 世紀までの先住民意識にとっては重要な要素であったが、社会情勢の変化から 17 世紀には忘れ去られ、不要となったものである。４枚の花びらを持つ花は、東西南北四つの方向の集合であり、全宇宙のシンボルであった。４枚の花びらの中心点はナウア語で「臍」の意味である Naui Ollinn と呼ばれる宇宙の中心である。含意としては第五の太陽の居場所、至高の賢神の住所、人類の創造者、遠近の支配者、不変の真理などがある。ちなみにこの１点しかない４枚花びらの花柄はやや高い位置に結ばれた腰帯のすぐ下にあることから、子宮内に宿した未来のキリストの存在をナウア語の絵文字で暗示していることになる。

図 17

② 花びらが８枚のものの図柄解釈（図 17）
先例として先住民の絵文書には最も明るい星の一つであることから最上位に格付けされた「金星」（明けの明星＋宵の明星）の象徴として使われてきた。新しい時代の幕開けと調和の願いの表明であり、それが８点あるということは時間の継続性への願いも強調されている。

③ 枝までつけた花の房の図柄解釈（図 18）

デザイン的には大きく二つの部分に分けられる。

1) 三角形の輪郭の部分：「テペヤックの丘」という地名を示す絵文字でも使われているように、この△部分はナウア語絵文字の tepec（丘、神殿）に対応している。Tepec は土地の防衛、ある共同体の庇護の意味もあり、そこから派生して「神殿のある場所」の含意ももつ。ここでは＜神の母＞の出現した場所のメタファーとしても解釈できそうだ。

図 18

2) 小花や葉をつけた曲がった茎の部分：ナウア語絵文字の al（川、水、体内の血液）に対応している。" al" は生命の源泉で、"tepec" の選ばれる場所には "al" が充満しているのが必須条件となる。

従って "tepec + al" の接合された花の房の絵文字は "altepetl"、即ち（豊かな）共同体、村、国、文明の意味をもつ。先住民にとっての一番の恐怖とは、丘（あるいは神殿）が破壊されて水のあふれでる大洪水が起こり、世界が消滅することである。だから聖母の衣服に上描きされていることの意味は、世界の崩壊を防ぐ新しいシステムの萌芽を提示し、安全を示唆しているのではないか。先に聖母のチュニックの色が大地を暗示させるものなっていることを述べたが、その上に房をつけた花が描かれていることは、花が大地に根づいていることを視覚的に表現したものだろう。この花の房はまた人の顔のようにも見える。このことから、新しい文明生活や信仰、あるいは教育が人間に顔を与えることも暗示しており、新しい神の役割も人間に顔（人格）と心（生きる意志）を与えるものであることを示しているのだろう。（図 19）

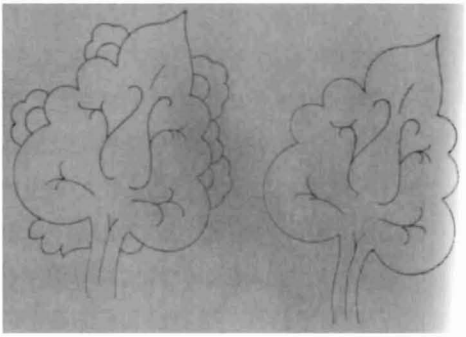

図 19

終わりに

スペイン人征服者たちの侵入によって先住民伝統の神々が消滅した。その喪失感を埋めるために与えられた聖母像が、黒髪と褐色の肌色という先住民の人種的特性と類似していたことからすぐに親近感を抱き、瞬く間にグァダルーペ信仰が被征服者住民の間に広まった、という従来から言われ続けてきた説明には常々疑問を感じていた。先住民をあまりにも素朴で文化を持たない非文明人だったとの上からの目線で見下し、グァダルーペの聖母図像がいかに普遍的な美に満ちたものであるかを強調する言説だけでは理解できない秘密が隠されているのでないかという疑問であった。それが新しい科学技術の導入によってそれまで無意味なものとして無視されてきた装飾的図像要素が、実はナウア語絵文字であり、それも他の絵文書類を参照することで解読可能なものに解明されたことは喜ばしい結果である。

1531年末に簡素な礼拝堂が完成するやいなや、多くの参詣者が訪れ、必ずしもナウア語母語者でない遠方からの巡礼団も組まれるようになったとの記録は多いが、その来訪者たちは実は聖母図像そのものを見にきたというよりは、まずはこのナウア語の絵文字に託されたメッセージを確認に訪れたのではなかったか。ナウア語の絵文字を解読できない先住民新世代やメスティーソに対しては、ナウア語話者で礼拝堂横に常駐することとなったファン・ディエゴが解説者として積極的に貢献したのだろう。だがディエゴも没し、世代交代や混血化も進んでナウア語の素養を持つ人口が減り、もはや絵文字であることさえ理解できなくなり、17世紀には単なる花柄装飾文様としてしか扱われなくなった、というのがこの聖母図像の真の歴史だろう。

とはいえ、このグァダルーペの聖母図像にまつわる多くの謎は相変わらず謎のままである。信仰世界では1737年にメキシコ市の守護聖人、1746年にはカリフォルニアからエル・サルバドルに至る全ヌエバ・エスパーニャ副王領の守護聖人、そして1946年にはカナダ、アメリカ合州国を含む前アメリカ大陸の守護聖人と順次格上げされてきた。その都度聖母像の真正性についての検証がなされてきたがそれら報告書類が公表されたことはない。一研究者としては、今後、過去に実施された真正性検証のための調査報告が一つでも公表され、信仰世界とは無縁な

美術作品として自由に研究できる日がやってくることを願ってやまない。

以上。

＜図版リスト＞

1．ファン・ディエゴの彫像。グァダルーペ寺院蔵。2008 年撮影筆者。

2．ヨハネ・パウロ 2 世のミサ当日の群集。2002 年 7 月 31 日撮影。グァダルーペの聖母寺院配布カタログより。2002 年 10 月発行。

3．アステカ時代の戦士衣装でファン・ディエゴの聖人化を祝うメキシコ人たち。2002 年 8 月 1 日筆者撮影。

4．「法王がやってきた」、PAN の公式 T シャツデザイン、2002 年 8 月筆者入手、2008 年撮影。

5．トラテロルコ絵文書、アマテに水彩、1562 年。副王と司教というスペイン人支配者の下に 4 人のメキシコ市先住民統治者が描かれている。メキシコ国立人類学博物館蔵。

6．「話しを伝える鷲」の典型的絵文字。吹き出しがメッセージだが現在では解読不可能。

7．Poeticum viridarium 所収のイラスト「グァダルーペの聖母の奇跡とファン・ディエゴ」。メキシコ国立古文書館蔵エンリケ・ディアス・コレクションより。

8．「グァダルーペの聖母の奇跡譚」、ミゲル・カブレラ作フレスコ画、テポツォトラン植民地博物館ハビエル礼拝堂壁画（部分）、1762 年。1990 年筆者撮影。

9．ティルマを広げるスマラガ司教とファン・ディエゴ、グァダルーペ寺院パティオ野外彫刻、2008 年筆者撮影。

10. 1531 年建造の最初のグァダルーペの聖母礼拝堂設計平面図。メキシコ国立古文書館蔵、首都大聖堂寄贈コレクションより。

11. グァダルーペの聖母像。グァダルーペの聖母寺院新バシリカ礼拝堂蔵。公式カタログより。

12. Sanchez, Miguel, *Imagen de la Virgen Maria MADRE DE DIOS DE GUADALUPE, Milagrosamente Aparecida en la Ciudad de Mexico*,,1648, 表紙筆者撮影、メキシコ国立古文書館蔵。

13. グァダルーペの聖母像設置場所、筆者撮影、2008 年。

14. グァダルーペの聖母像細部、デジタル写真複製コピー（個人蔵）より、2009年筆者撮影。
15. グァダルーペの聖母像細部、デジタル写真複製コピー（個人蔵）より。2009年筆者撮影。
16. グァダルーペの聖母像細部、デジタル写真複製コピー（個人蔵）より。2009年筆者撮影。
17. グァダルーペの聖母像細部、デジタル写真複製コピー（個人蔵）より。2009年筆者撮影。
18. グァダルーペの聖母像細部、デジタル写真複製コピー（個人蔵）より。2009年筆者撮影
19. Zarebska, Carla, *Guadalupe*,Taller de comunicacion grafica, 2002,Mexico, p .136　参照。

（本稿は2009年7月9日早稲田大学での講演用パワーポイント原稿に大幅な加筆・削除・修正を加え、学生講義用に改編したものである。文章化と発表にあたっては必要な参照文献、文献批判などの脚注、参考文献リストなど提示すべきことは重々承知していたが、筆者の緊急治療入院という事情から「麒麟」本号締め切りには間に合わないことが判明し、割愛させていただいた。いつの日か改定・補足版を上梓できる機会があることを誰よりも願っている。）